

# 大田区の 自然観察路



●コサギ

●アオスジアゲハ



●ウラギク

東京都大田区

## ごあいさつ

私たちが住む大田区は、都市化が進み、自然や自然空間が残り少なくなってきました。

こうした中で、人と自然との“ふれあいの場”をつくる一つの方法として、区は5ルートの「自然観察路」を整備いたしました。

自然を知るには、自然観察会に参加して、自然に詳しい方から直接指導を受けるのがいちばんです。

けれども、いつも自分のつごうのよい時に自然観察会が開かれているわけではありませんし、団体行動より少人数でゆっくりと歩きたいという方もいることでしょう。そんなときに役立つのが「自然観察路」です。

このパンフレットでは、大田区を代表する自然環境をテーマにした自然観察路のモデルルートを紹介しています。

多くの皆様が身近な自然にふれ、学び、今後それをどのように守り育てるのかを考えていただければ幸いです。

平成7年3月

大田区環境部

### 目次

大田区の自然環境	2
自然観察路を歩こう	3
縄文のみち	5
雑木林のみち	7
池のみち	9
川と干潟のみち	11
海と埋立地のみち	13

# 大田区の自然環境

大田区の自然環境は実に多様性に富んでいます。池上本門寺や多摩川台公園の樹林には、山に行かなければみられないような鳥たちが冬越しにやってきます。多摩川の河原は、区内では貴重なつながりをもつた自然です。干潟には多くの生物のすがたがみられ、春や秋には旅鳥たちが羽を休めます。現在みられるような大田区の自然環境は、どのようにして生まれたのでしょうか。

**狩猟採集の時代** 大田区は、地形的にみると、北西部の台地と東南部の低地、埋立地に分けられます。台地は武蔵野台地の一部であり、多摩川などの河川の沖積地との境目は段丘崖となっています。現在わずかに段丘崖に残るスタジイなどの常緑樹林は、かつては区内全域をおおっており、狩猟採集時代のわたしたちの祖先の生活の場でした。

**農耕の時代** 明治時代の東大田区は、台地には雑木林と麦畑、低地には水田が広がる農村地帯でした。台地のまわりのヤトとよばれる谷では、種もみを田に直まきするつみ田がつくられていました。東京湾の沿岸漁業も盛んであり、干潟ではハマグリやアサリがとれました。多摩川では昭和9年に調布取水堰が作られるまで、アユ漁もおこなわれていました。

**商工業の時代** 京浜工業地帯の東京と川崎・横浜の中間点に位置する大田区は、交通網も発達し、いち早く工業化、商業化をとげてきました。その反面、過去にみられたような自然が失われるのも早く、北西部の台地は住宅地に、南東部の低地は商工業地帯に変化しています。さらに、遠浅の海は埋め立てられて、東京国際空港(羽田空港)や工業地帯がつけられています。

**現在の東大田区** 現在の東大田区は、このような都市化の影響を大きくうけています。北西部の台地上にはわずかに樹林が残されていますが、南東部の低地ではすっかり緑が失われています。また、多摩地域などと比べて、帰化植物が全体に占める割合(帰化率)も高くなっています。また、埋立地では、鳥類の数も多くみられますが、内陸の住宅地では数がぐっと少なくなっています。多摩川の汽水域や京浜運河など、水の流れが一時的に止まる場所では、汚れがたまりやすく、水生生物の生息にも大きな影響が出ています。

# 自然観察路を歩こう

大田区の代表的な自然環境を観察するのに適した「自然観察路」の5つのモデルルートをつくりました。このパンフレットを片手に、自然観察路を歩いてみましょう。また、自然観察のヒントを(?)で示しました。実際に観察してみましょう。

十分な準備を

歩くのに適したはきものや服装でお出かけ下さい。とくに、「川と干潟のみち」、「海と埋立地のみち」では、長靴が必要な場所もあります。また、夏ならば強いひざしをさえぎるつばのひろい帽子、冬ならば防寒具が必要です。野鳥観察をする方には、7~9倍位の双眼鏡があると便利です。

ゆっくり歩いて、じっくり見よう

自然観察路の中では、いろいろな生き物たちがあなたに語りかけてきます。自然観察とは、そんな生き物たちのコトバを聞き取ることで。急いで走りぬけてしまつては、小さなささやきは聞こえません。ゆっくり歩いて、じっくり観察しましょう。

自然のコトバを聞きとろう

生き物たちが人間のコトバを話せたとしたら、どんなおはなしをするのでしょうか。江戸時代の大田区を知っている多摩川台公園のマツは、今の多田区をどう感じているのでしょうか？シベリアと熱帯を往復する旅鳥にとって、東京湾の埋立地はどんな意味を持っているのでしょうか？

自然を回復する方法を考えよう

私たちのすむ大田区を自然の豊かな区にするためには、どうしたらよいのでしょうか。歩いた後で考えてみましょう。生き物たちのコトバから、何かヒントはありませんでしたか。

とくに自然破壊や環境の悪化が進んだ時に現われる「指標生物」に注目すると、自分のすんでいる地域の自然がどのような状態になっているかがわかります。逆に、現在より少しよい状態の指標生物を選んで「目標生物」とすれば、環境の向上のよい目標となります。

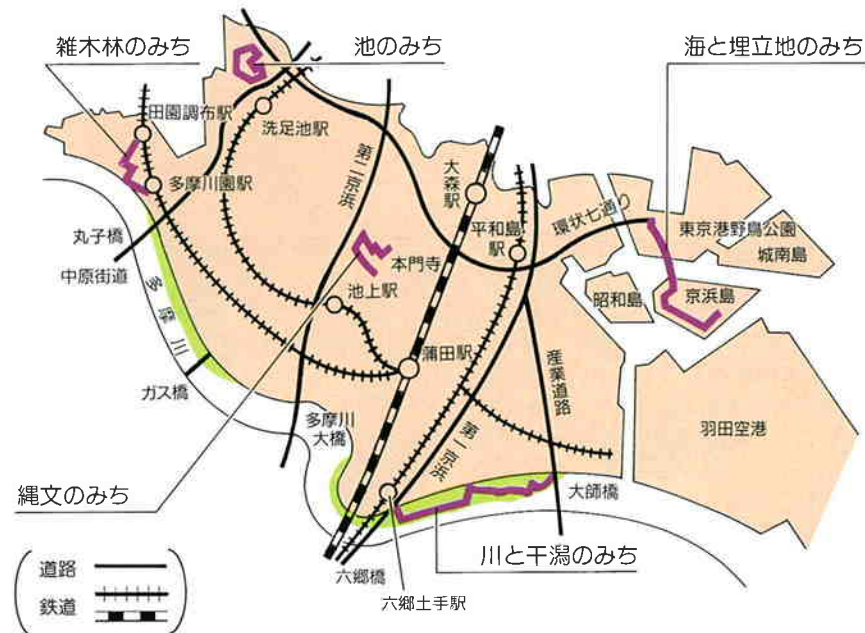
自然観察路を作ってみよう

モデルルートは、大田区の代表的自然をとおるようにつくられました。自然観察路は、通学路や散歩道に作ることもできます。自分の住んでいる地域にも、自然観察路を作ってみましょう。

いちばん簡単な方法は、観察のポイントに観察番号札をつけてパンフレットの中でそれを説明する「番号札方式」です。この方法ならば季節にあわせて内容をつくりかえることも簡単です。

少しでも多くの人が身近な自然に関心を抱くように、自分の作った自然観察路で自然観察会を開いてみるのもよいでしょう。

## 大田区自然観察路モデルルート



## 自然観察路を歩くときに

歩きやすいフツ



帽子(夏)



弁当



ルーペ



双眼鏡



長ブーツ(川・海)



防寒具(冬)



雨具



フィールドノート



望遠鏡(川・池・海)

# 縄文のみち

この観察路は、本門寺公園、本門寺社寺林、池上梅林をめぐるコース。

ここには、区内でもっとも広い面積にわたって常緑樹林が残されています。ツヤツヤした葉をもった林は照葉樹林とも呼ばれ、縄文時代には大田区一帯をおおっていたと考えられます。

コース：本門寺公園→本門寺林→池上梅園(1.6km)

交通：東急池上線池上駅下車

## 1. スダジイの林

本門寺公園には、うっそうとしたスダジイの林があります。スダジイはカシのなかまで、ドングリに似て殻に包まれた実をつけます。

林の中には、アオキ、シュロ、ベニシダなど暗い林の中でも育つ植物がみられます。

### 《池上本門寺林》

区内でもっとも広い面積にわたって樹林が残されているのが、この池上本門寺です。スダジイの林の中には、ネズミモチ、アオキなど常緑の低木が鳥たちの餌となる実をつけています。

広場は、餌をもらいに来るドバトでいっぱいですが、林の中にはキジバトの姿がみられます。

### 《五重塔》

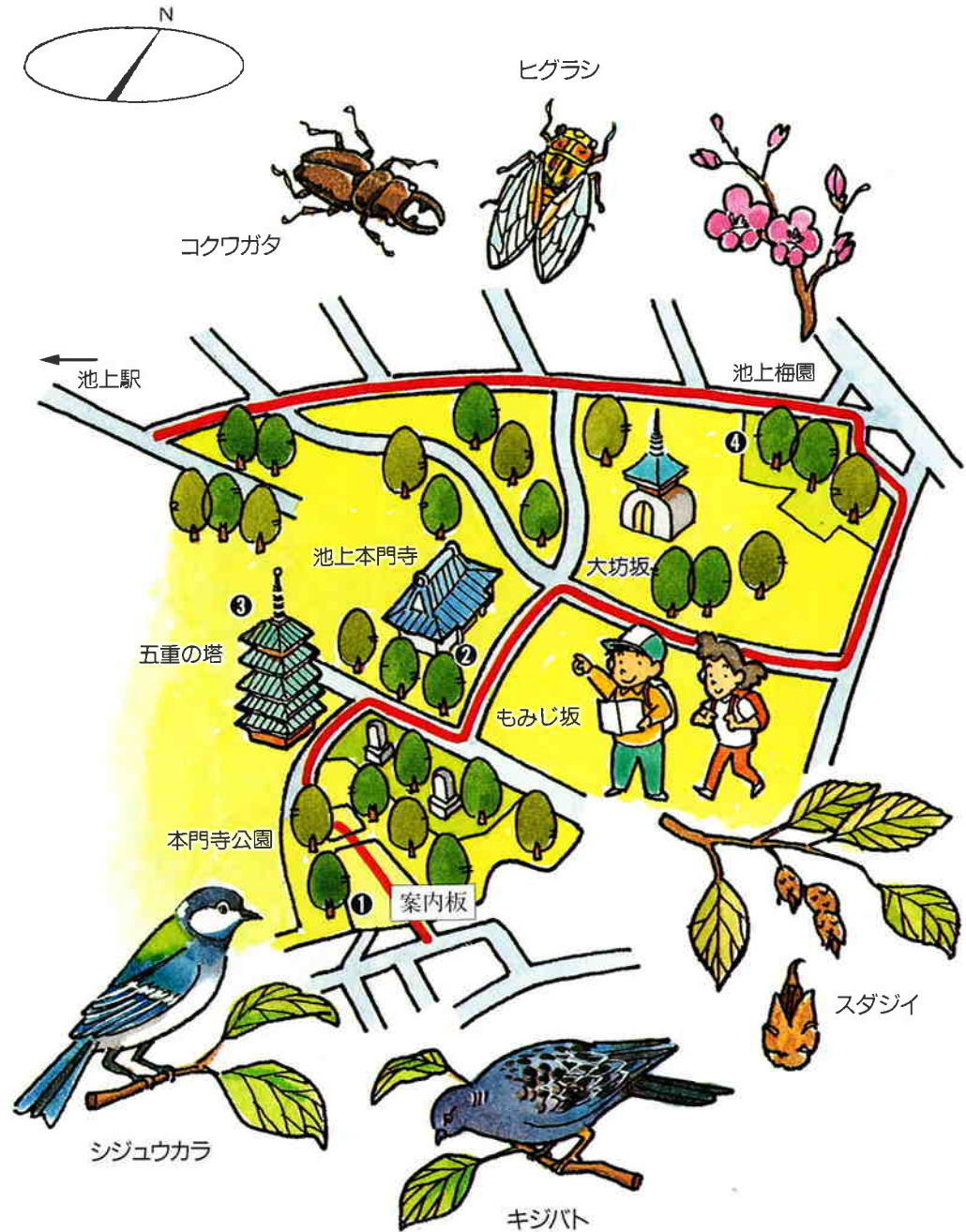
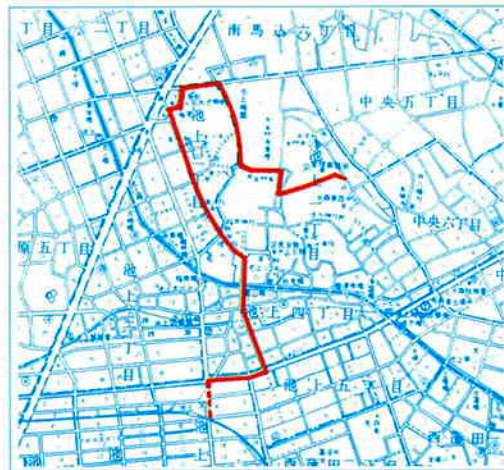
そばには、コナラ・イイギリなどの落葉樹の林があります。

夏の夕方には、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、そして都内ではなかなか聞かれなくなったヒグラシの声もします。

## 2. 池上梅園

池上梅園には、大田区の花である梅が植えられています。

早春、梅の花の季節に訪れると、うぐいす色をしたメジロが花の蜜を吸っているのがみられます。



# 雑木林のみち

多摩川園から田園調布駅までの1.3kmの道のりを歩きながら雑木林の自然を観察するコース。

コース：多摩川園駅→多摩川台公園→宝来公園→田園調布駅(1.3km)

交通：(行き)東急目蒲線多摩川園駅下車  
(帰り)東急目蒲線田園調布駅

## 1. 多摩川の風景

ここから見る風景は、建設省が住民投票をもとに選定した「多摩川八景」の一つです。(?)富士山や丹沢が見える日は、一年に何日あるでしょうか。散歩のときに調べてみましょう。

### 《亀甲山古墳》

この前方後円墳は、五世紀前半ごろこの地方を治めていた豪族の墓であるといわれ、昭和3年に国指定の史跡になっています。まわりの丘もほとんど古墳ですが、その後、薪や堆肥をとるための雑木材となっていました。

## 2. 雑木材

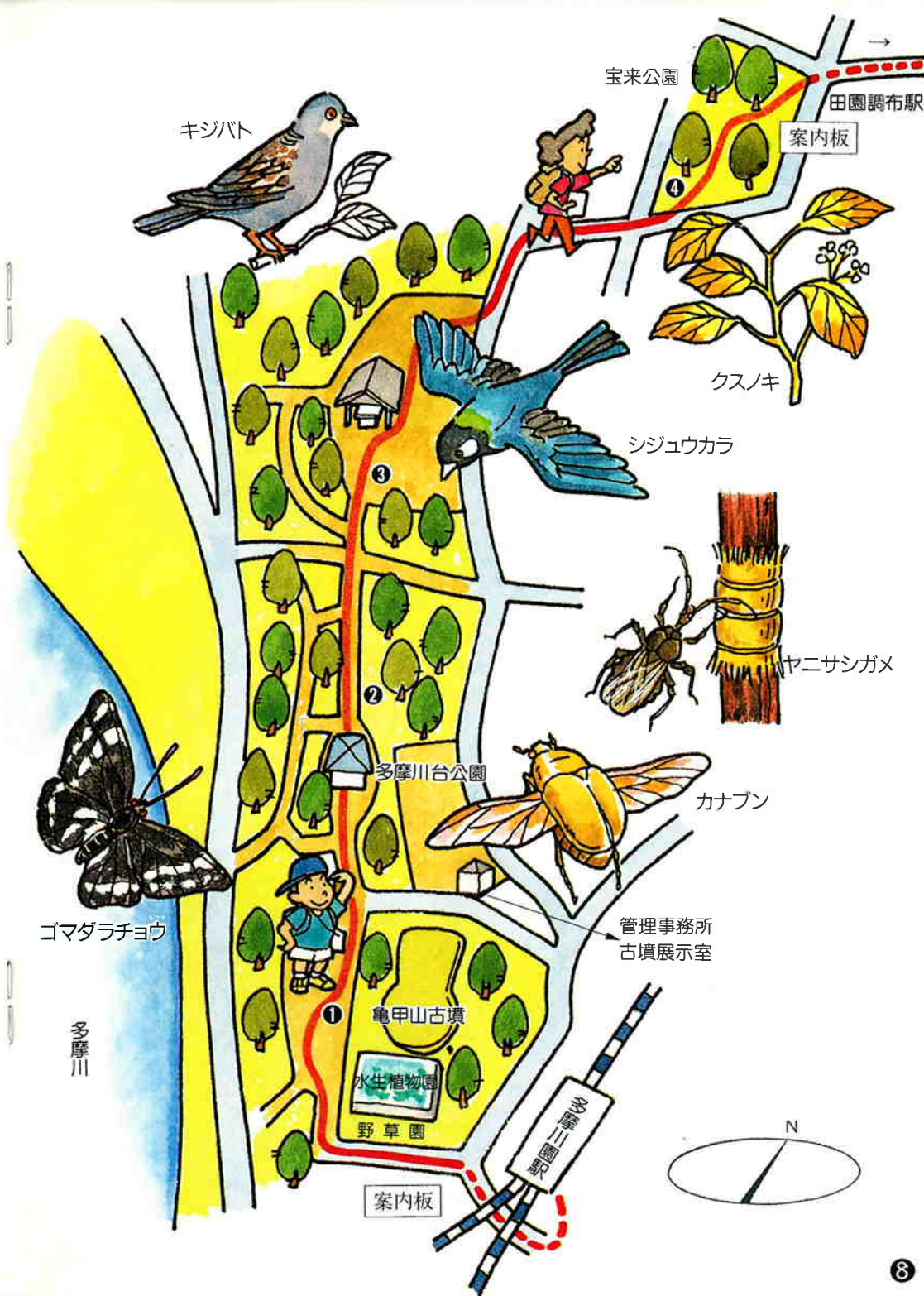
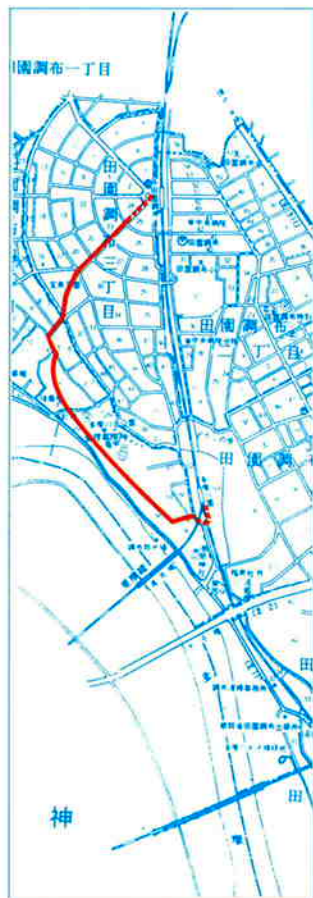
コナラ、エゴノキなどの木の下はよく手入れされていて、ムラサキシキブ、ガマズミなどの低木とアズマネザサが生えています。(?)樹皮に人工の樹液を塗ってみましょう。どんな昆虫が集まってくるのでしょうか。

## 3. アカマツ林

冬、この林を歩くと、「こもまき」をしたアカマツが目立ちます。こもの中には、マツケムシのほかヤニサシガメやテントウムシなどが冬ごしをしています。

## 4. 大田区の木「クスノキ」(宝来公園)

植栽されたクスノキがみごとです。クスノキのような常緑樹は葉を落さないのでしょうか。5~6月ごろに行く機会があったら、枝先を見てください。褐色の毛につつまれた若葉が開き、古い葉は茶色になって落ちていきます。



# 池のみち

洗足池を一周しながら、池と周辺の林を観察する1.2kmのコース。

コース：洗足池一周(1.2km) 交通：東急池上線洗足池駅下車

## 1. コンクリート護岸から多様な水辺環境へ

以前はほとんどがコンクリート護岸になっていましたが、現在、洗足池公園整備計画に基づき、多様な水辺環境を創りだす試みがはじめられています。

いまでは、アメリカザリガニやアメンボだけでなく、モノサシトンボ、アジアイトトンボ、シオカラトンボなどのヤゴや成虫も見られるようになりました。

## 2. 八幡神社の杜

八幡神社の境内には、スタジイ、シラカシなどの常緑樹がみられます。もともと関東地方はシヤカシの常緑樹におおわれていましたが、人が住むようになると農地や雑木林に変わり、シヤカシは神社やお寺の森でしか見られなくなってしまうました。

(?)シヤカシなどの常緑樹と、ケヤキなどの落葉樹を比べてみましょう。

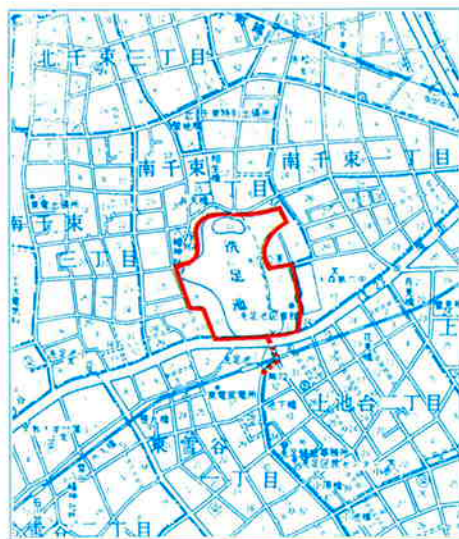
## 3. コナラの林

池の北側にはコナラの林があります。夏にはクロアゲハが飛び、地表にはコクロシテムシなどの森の掃除屋さんが見られます。

(?)クロアゲハの幼虫はどこにすんでいるのでしょうか。

## 4. カイツブリ

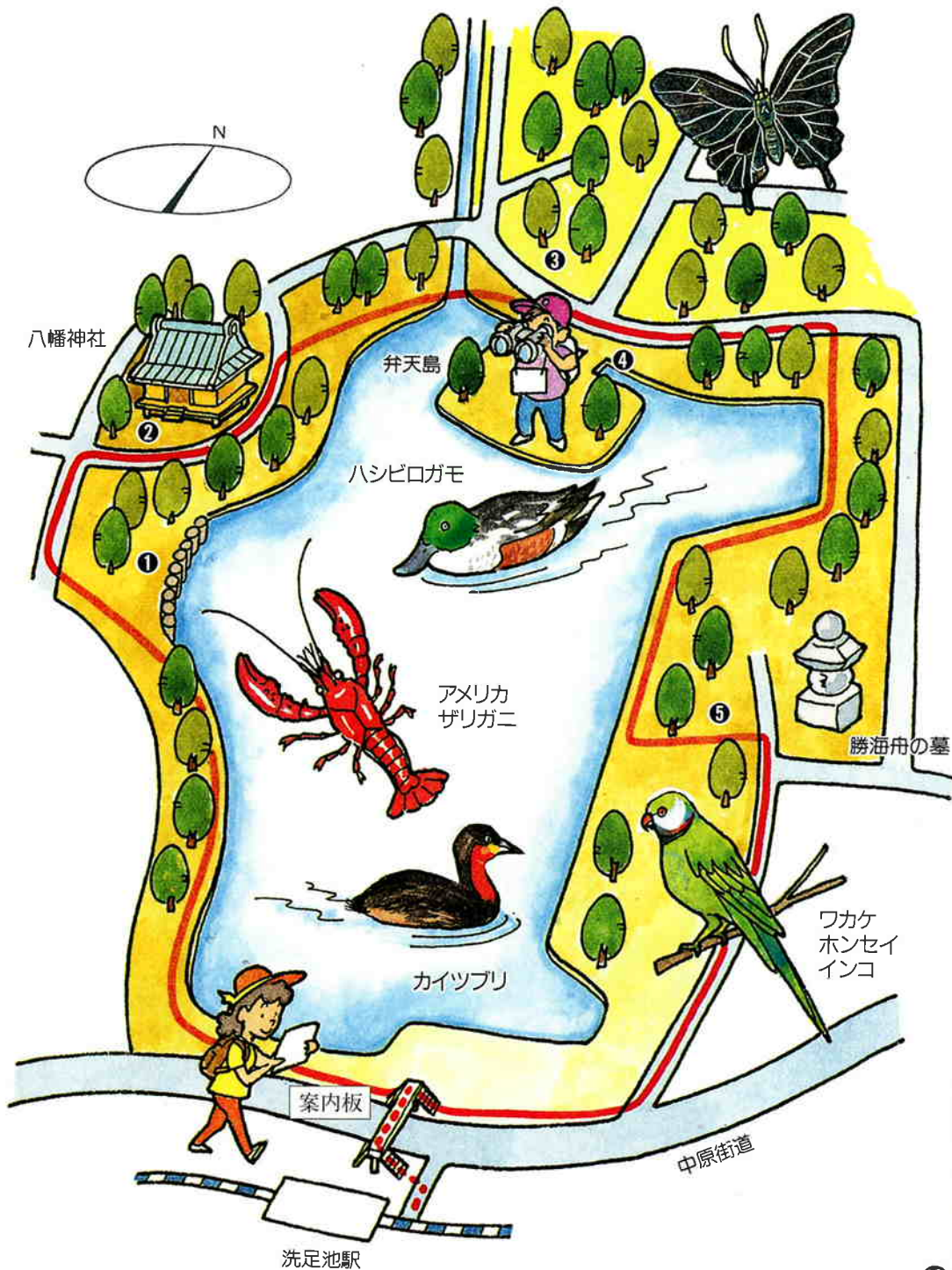
橋をわたって弁天島から池をながめると、広い水面にカモの姿が見られます。夏も冬もいるカイツブリは、池にもぐって魚や貝をとります。冬になると、カルガモやカイツブリに加えて、ハシビロガモやキンクロハジロがやってきます。



## 5. かごぬけ鳥

最近、インドやスリランカの半砂漠が原産のワカケホンセイインコがふえ、この公園近くでも、早朝や夕方に群れになって飛ぶ姿が見られます。このような外来の鳥は、人間がペットとして飼っていたものがかごからぬけ出したもので、「帰化鳥」とか「かごぬけ鳥」とか呼ばれています。

クロアゲハ



# 川と干潟のみち

六郷橋から大師橋まで多摩川にそって、川・干潟・あし原・グランドなどの代表的な自然を観察する3.6kmのコース。

コース：六郷橋→大師橋まで(3.6km)

交通：(行き)京浜急行六郷土手駅下車

(帰り)大師橋下バス停から京浜急行バス(蒲73)で蒲田へ、(川76)で六郷土手駅へ

## 1. 冬の水鳥

六郷土手から多摩川の河川敷に入ると中州が見えます。冬ならば中州の手前に、マガモ・オナガガモなどのカモたちが泥の上を歩いているのが見えます。

## 2. 六郷水門

江戸時代に灌漑用水として掘られた六郷用水は、鶴の木付近で北堀と南堀にわかれ、北堀は池上方面に、南堀は矢口、安方、道塚を経て、六郷や羽田の水田をうるおしていましたが、今ではほとんどが埋め立てられてしまいました。

## 3. グランドの植物

よく踏みつけをうけるグランドには、オオバコ、セイヨウタンポポなどの「踏みつけあと群落」ができています。踏みつけの少ないところでは、チカラシバ、カセクサなどが見られます。(?)グランドから離れるに従って、植物の背丈はどう変わるでしょうか。

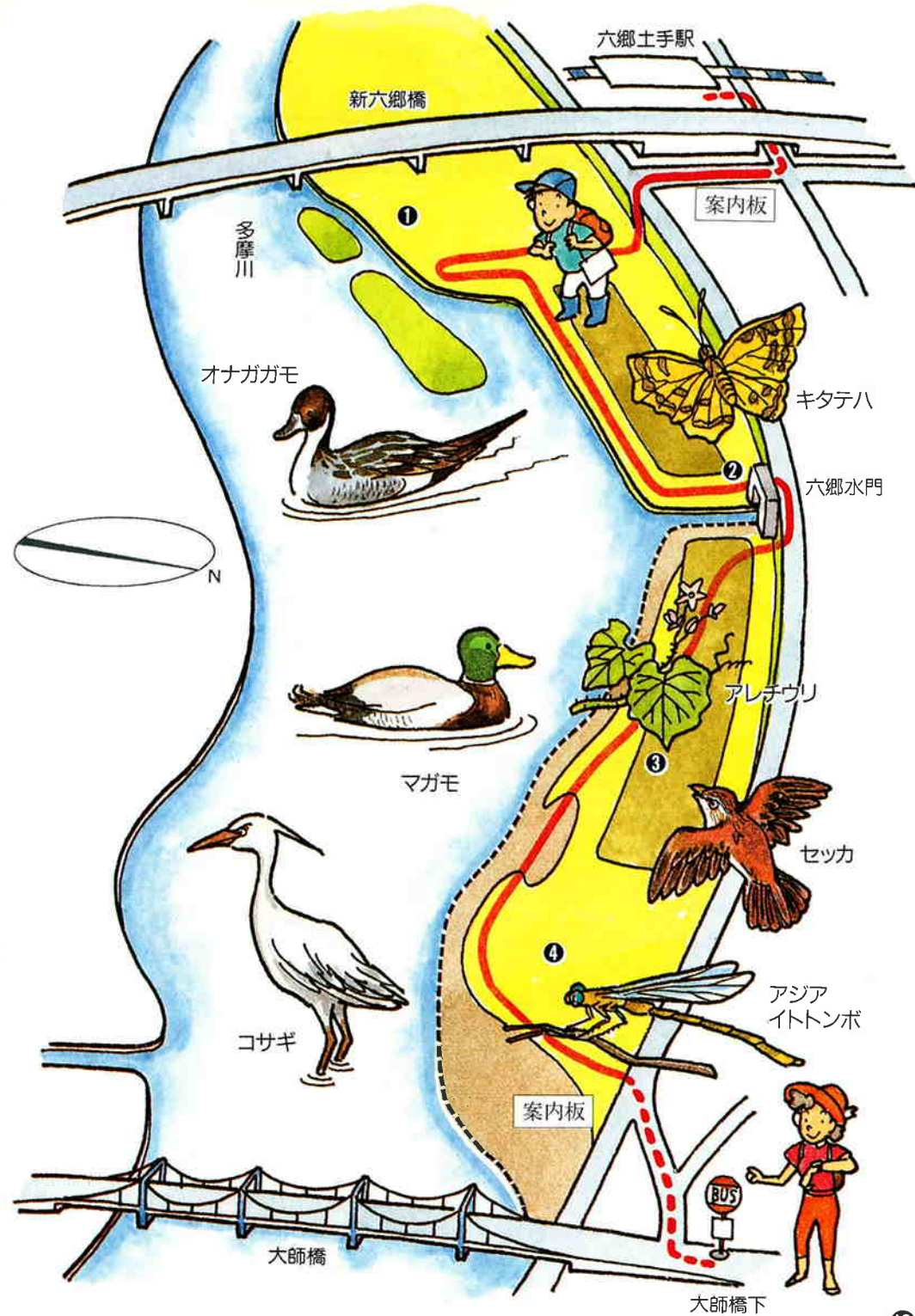
## 4. 干潟の生き物

潮が引いたときにできる干潟には、ゴカイなどのさまざまな生き物がすんでいます。なかでも貝類などエラで水をこして餌をとる動物は、川の浄化に大きな働きをしています。シギやチドリなどの旅鳥がこれを食べにやって来ますが、ここには大師橋より下流で見られるカニの姿が見られません。

## 5. アシ原の生き物

河原のアシ原は、動物たちにとって大切な生活の場です。オオヨシキリやセッカの特徴的な鳴声は、夏の河原の風物詩です。

また、このあたりには、ヒメマイトトンボなどの貴重な昆虫も、過去に確認されています。



# 海と埋立地のみち

海と干潟にすむ生き物や水辺の鳥たちを観察する約3.5kmのコース。

コース：東京港野鳥公園→京浜島(3.5km)

交通：(行き)大森駅東口から京浜急行バス(森24・25・36・43)で野鳥公園下車  
(帰り)京浜島海上公園バス停から京浜急行バス(森24・36)で大森駅へ

## 1. 東京港野鳥公園

野鳥公園は、人と野鳥とのふれあいの場として、人の手によってつくられた公園です。ブラインドの窓から望遠鏡を使って、鳥たちの生活をのぞいてみましょう。池には、カルガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、コガモなどにまじってオオパンの姿がよく見られます。

また、自然が豊かである証拠に、コミミズクなどの捕食者もすんでいます。

### 《干潟の生き物》

城南大橋(前浜干潟)、京浜つばさ公園前や森ヶ崎のハナなどで干潟を見ることができます。これらの干潟には、ケフサイソガニなどたくさんのカニがすんでいます。杭には、外国産のタテジマフジツボなどを見つけることができます。

## 2. 海岸歩道

京浜大橋を渡り、京浜島の海岸歩道を歩いてみましょう。

釣をしている人がいたら、釣れた魚を見せてもらいましょう。

(?)ハゼやボラなどの海の魚を食べても異臭がしないようにするにはどうすればよいでしょうか。

## 3. 森ヶ崎のハナ

潮が引いたとき、ここには浅瀬ができて、シギやチドリが泥の中のゴカイなどを食べにきています。

シギやチドリには、春と秋の渡りのとちゅう、日本の干潟で羽を休めるものが多く、「旅鳥」と呼ばれています。

潮が満ちたときには、スズガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモなどの「潜水採餌ガモ」が海にもぐって魚をとっているのが見られます。

(?)「潜水採餌ガモ」は、何秒ぐらいもぐっていられるのでしょうか。

